シハ、余ガ誤リ也、

〔嬉遊笑覽二中器用〕鉈屋笠は、夷曲集、京のなたやといふ者發心して、大なる鉦たゝき、大笠きて、京田舍ありくを見てよめる、近吉笠かねも捨て菩提をさとれかし生木に灘や氣の毒な體、略註近頃空也寺の法師江戸に來り、勸化しありきしが、竹皮の異なる大笠をきたり、なたや笠も此等の類なるべし、

〔明良洪範一〕正保ノ頃ニヤ有ケン、略中京都ニ鉈屋何某トテ富家有ケル、何事ニヤ科有テ、入牢申付ラレシ、略中鉈屋ノ二子ハ、遁世ニ異ナル笠ヲ冠テ、廻國セシト也、

〔甲子夜話四十一〕松山侯ノ松平隱岐守駕籠ノ者ノ笠ハ、世ニ唐人笠ト謂フ形ナリ、帽頭アリテ隆ク造レリ、

以人名爲名

〔好色五人女三〕姿の關守

其跡に廿七八の女、さりとは花車に仕出し、略中吉彌笠に四ツがはりのくけ紐を付て、顏自慢にあさくかづき、略下

〔常山紀談九〕鐵の笠は、甲州にても下部は著たりしとかや、畿内の方にはなかりしに、丹州龜山の小野木縫殿助、足輕已下の者に鐵の笠を著せける故に、其頃は小野木笠といひけるとなり、

〔本朝世紀〕久安四年四月十八日乙巳、參議藤原忠雅卿著結政座行請印事、齋院司申、三年一請、太宰府蛞蝓蓑蛞蝓笠官符也、

雜笠

〔東海道名所記三〕田の中には、早乙女どもをりたち、田蓑ひぢがさきて、思ふことなげに、田歌をうたひて早苗をうゆ、

〔守貞漫稿二十九〕蜻蛉笠

是モ眞竹籜ノ粗製也、形圖略ノ如ク亘リ尺許也、江戸邊ノ船人筏士等用之、號テトンボガサト